

フェラーリと リシャール・ミル

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオビニオンを直球で発信し世相を斬る「オレの話を開け!」。第3回は、革新的な時計で知られるリシャール・ミルと、フェラーリの共通点を上げ、真の“ブランド”とは何か?について、時計ジャーナリストの広田氏との対談を通じて語る。

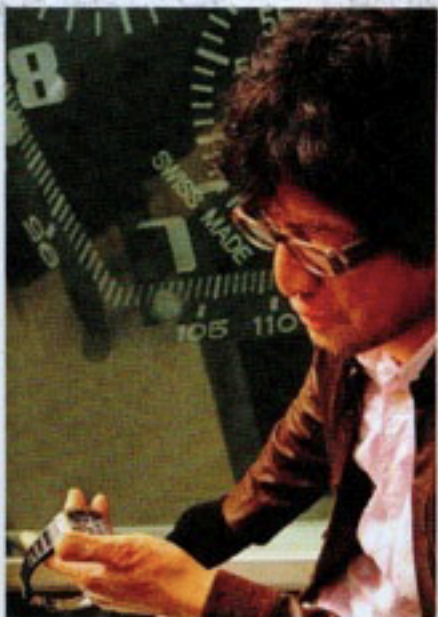
TEXT●太田哲也 (Tetsuya Ota)
PHOTO●降旗俊明 (Toshiaki Furuhata)
リシャールミルジャパン

オレの話を開け!

太田哲也の

Q クルマも時計もびんきりですが、腕時計はクルマほど性能が違わない。高額腕時計を買う人の動機は見栄なんですか?

A 最近、FRで、12気筒で、フェラーリのフラッグシップであるF12に乗る機会があったけど、予想していたのと大きく違っていた。オレはてっきり上品でクラシカルな内装を予想していたんだ。ところが乗り込んでみたら、ステアリングは現代のF1マシンのようにカーボン製で、エンジンスタートやダンピ

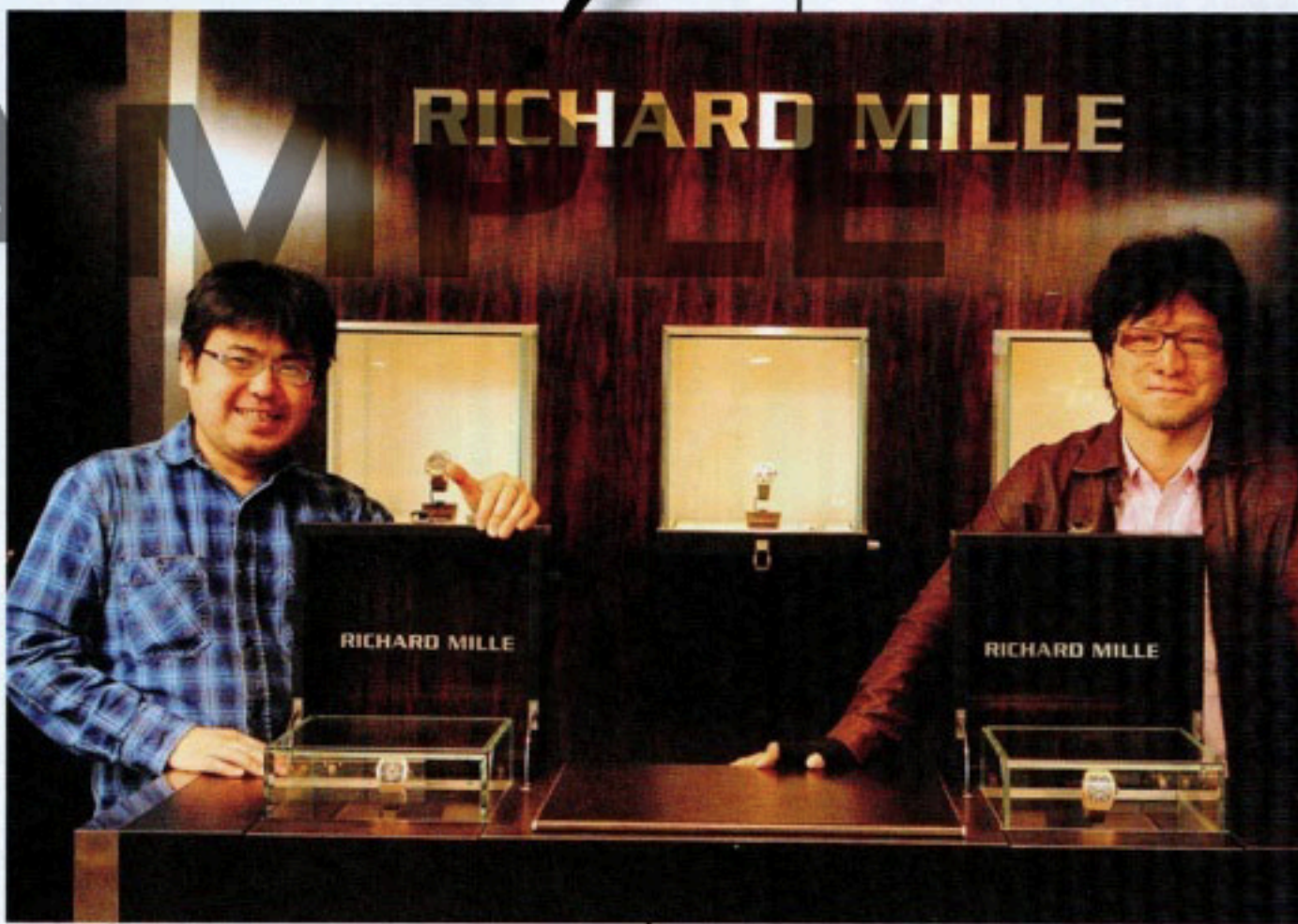


ング変更スイッチが配される。右下のレバーで「ウエット」「スポーツ」「レース」「CTオフ」「ESCオフ」のモードを選択。インパネには周回ごとのラップタイムが表示され、6000rpmを超えるとステアリング上部が点灯する。まるでこの回転数以上にキープして走らないとタイムが遅いぞ!というメッセージのよう。3590万円のフラッグシップモデルを購入するユーザーとなれば、おそらく経済的に余裕が出てきた50代/60代だろう。そういう人に対してフェラーリは「人生の余韻を楽しみましょう」ではなく「サーキットを走れ! アグレッシブに生きろ!」というメッセージを伝えるのだ。

現在のフェラーリ社の成功は言うまでもない。世界的なブランド価値評価機関に「世界でもっともパワ

のあるブランド」として認定された。増収増益が続く、ユーザーに支持されている。ということは多くのユーザーが、こういう「攻めの意志」を歓迎しているということだろう。そこでふと思いついたのは最近よく目にする、高級腕時計の世界で勃興する新興勢力の潮流だ。こちらにも「上品・クラシック」ではなく「過激なデザイン」を採用するブランドが目立つ。リシャール・ミルなどは必ずしも高価な宝石が散りばめられているのではなく、素材は機能的なチタンやナノカーボンなど。それについておそろしく高価だ。そのデザ

インは現代のF1のステアリングのようにゴチャゴチャしているけど機能性を有している。この話を編集担当に話したら、「では実際にリシャール・ミルを見に行ってみましょう」ということとなった。と言っても時計に関してオレはズブのシロートなので、時計評論家の広田氏にも同伴していただくことに。「ラグジュアリーな時計とクルマとの関係性」が今回のテーマだ。しかし、7770万円ってどういう価格だろうか。時計の値段としてせいぜい100万円くらいがオレの範疇だが、リシャール・ミルは、最



RICHARD MILLE
「最高の素材・最高の技術を用いて時計のF1を作る」——その理念通り、常に最先端をいくブランド。「一番良い腕時計」を目指すその姿勢は、まさに腕時計界のフェラーリだ。

低価格が数百万円。7770万円の時計を腕にはめてみたけど、普段だったら怖くてする気にならないなあ。まあそれはともかく、クルマと時計は似たところがある。クルマ好きはたいてい時計(に限らず機械やモノ)も好きであろう。では違いは何か? クルマの場合は、特に男にとっては人に自分を人生の成功者と見せたい、あるいはそうして誇示した方がビジネスにプラスとなる、そんな要因があるだろう。そのために大枚を払う理由はある。ところが時計の場合は他人にアピールできるチャンスは少ない。もちろん高額時計をしていけば目立つことは目立つが、クルマ程は多くの人の目を釘付けにできない。見せまいとしたら見せないでも済んでしまう。それなのにリシャール・ミルは、400万~1億6000万円。どういうオーナーがどんな動機で購入するのか質問者でなくても不思議に思うのでは? リシャール・ミルの広報を務める高塚氏に、どんな人がどんな理由で買うのか聞いてみた。「購入されるお客様は経営者の方が多いですね。自分を鼓舞するというか、この時計を持ってもっとがんば

「つて働こうという感じですよ」

ここで少しリシャール・ミルについて説明しておこう。

フランス人のリシャール・ミルさんが創立した新興ブランドで、フライバック機構やトゥールビヨンなどの高い技術力を活かし、かつ耐久性の高いウォッチを提案する。フェラリF1ドライバーのフェリペ・マッサにも実践テストを兼ねて提供し



英国時計学会会員であり世界中の新旧時計に精通する時計ジャーナリストの広田雅将氏。時計をクルマに擬えた本誌『THE WATCH』での舌鋒鋭い解説は読みやすく、ファンも多い。

ている。ちなみにマッサがクラッシュしたときでも、時計は壊れなかったそうだ。

時計評論家の広田さんによればリシャール・ミルのパーツ加工精度は驚異的なのだそうだ。そのこだわりはリシャール・ミルさん自身によるもの。開発最終段階までできて気に入らず、机をひっくり返して発売が先延ばしとなることもしばしば。ちなみに「140歳まで生きて現役を続ける、それまでネタ切れすることははない」と常々言っているそうだ。

そうしたひとりのカリスマによるモノ作りの強いこだわりがプロダクトに現れている。その凄みが腕に貼って眺めていると、何となくでも強烈に伝わってくる。つまりこの時計に込められた創り手のチャレンジへの意気込みや物語性にユーザーは共感してお金を払うということなのだろう。

広田氏も言っていたが、見栄や外聞ではなく、むしろ自己満足が購入

動機になる要素が強いようだ。たとえ数百万円を支払っても、それで明日の仕事への活力が得られるなら元は取れる。購入価格を上回る利益を上げればいい。そんな考え方をする経営者に支えられているのだ。

時計に限らずクルマにも共通する、優れたモノ。が有する精神性、それが自分のモチベーションをアップさせてくれる。モノを買うとは、実はその精神を手に入れることなのだ。

Q 一生モノの時計とかクルマとあるのでしょうか？

A 実は近頃、時計を買おうかなと思っていたんだよ。レーサーとして、あるいはクルマ愛好家として、どんな時計を身につけるべきか？ 単純にスベックやブランド、見た目の雰囲気だけで選ぶのは格好よくない。選んだ理由を説明できることも大切だ。どうせなら一生モノを選びたい。よい機会だから専門家の広田さんにも聞いてみよう。そんな考えも今回の取材ではあった。

新しい時計を買おうと思ったきっかけは、昨年末、喫茶店でスタッフと打ち合わせしていたときのこと。ふと気付いたらソファに時計が落ちていた。「あれ!? バシヤ（カルテイエ）のクロノじゃないか。オレのと同じだ」。そう思っただけで拾い上げたらオレのだった。バンドのピンが飛んで切れてしまったんだ。その瞬間、一気に醒めてしまったんだよね。

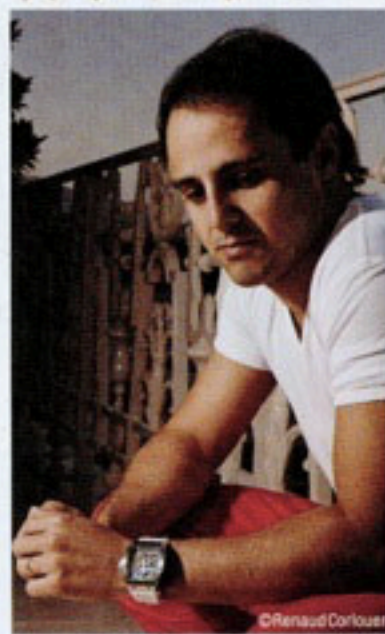
広田さんに聞くと、やはり宝飾メーカーの時計は、時計屋の作る時計よりも堅牢性で劣る面は否めないらしい。確かに昔つけていたロレックスは頑丈だったなあ。これを機会に一生モノを探そう。でも時計屋のはデザインが普通っぽいものが多いし、一生モノとなるとなかなか決められぬまま今日に至っていた。しかし今回の取材を通じて、そもそも一生モノのアガリの時計ってあるのだろうか？と思っただのも事実だ。

例えば日常的に使ってみないと自分の気持ちや感覚にマッチするか、あるいはステアリング操作したときに首振りの重さを感じないかなどはわかりにくい。それに他者の目ではなく自分のやる気をアップさせる目的なら、一生モノを選ぶアガリを求めること自体が無理なのではない

アガリについてさらに触れよう。アガリというのは過去の遺産となる。数か月前に元フェラーリ美術館・館長の松田さんと再会して話をした。今では美術館にあった多くのワインテージフェラーリを、数台を残して手放してしまったそうだ。松田さんの現在の愛車は新しいフェラーリ、599だった。結局、松田さんほどフェラーリを知り尽くした人でさえアガリは存在しない。アガリがあるということは自分の進化を止めることと同義なのかもしれない。

クルマも時計も未来に向けて自分のモチベーションを上げる手段として買うなら、買おうと思っただけで買わなければならないタイミンが、そこが新しいチャレンジの始まりなのだ。

リシャール・ミルの“ファミリー”



Felipe Massa

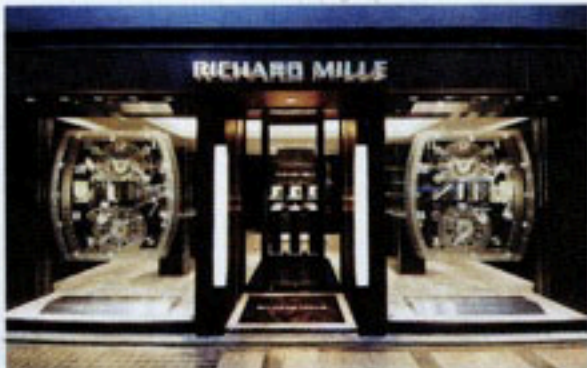
リシャール・ミルは世界のトップアスリートに自社製品を提供し、過大な負荷のかかる競技中でも身に付けてもらうことで、その成果を新製品へフィードバック。彼らは単なるアンバサダーではなく「ファミリー」と呼ばれる。競技の場から多くの成果を得るのは、まさにフェラーリがF1で用いた技術を市販車に投入するのと同様。両者ともに、プロダクトの信頼性は実用現場の最前線で磨かれ、裏付けられたものなのだ。



Rafael Nadal Parera



Bubba Watson



対談は国内唯一のオンリーブティック「リシャール・ミルGINZA」の店内にて行った。リシャール・ミルの最新プロダクトに直接逢えるパビリオンだ。住所／東京都中央区銀座8-4-2 ☎03-5537-6688



フェリペ・マッサの名を冠す「RM011」。レース中の激しい振動や重力加速度にも耐えられる設計のクロノグラフで、フライバック機能も搭載する。右のチタンは903万円、左のRG/チタンは976万5000円。因みにトゥールビヨン&カーボンコンポジットの「RM050」は7770万円！



広範な知識とユニークな広田氏の解説を読んで「是非」と望んで実現した瀬田。広田氏も「太田さんは尊敬する人物」と快諾し、時計とクルマを巡る談義を繰り広げた。

告知 8/15 Tetsuya Ota 出光 ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON with Volkswagen 開催(袖ヶ浦)

テーマは、「正しい運転を、楽しく学ぶ!!」。

袖ヶ浦フォレストレースウェイを会場に、「エンジョイ・ドライビングレッスン」、「セイフティ・サーキットレッスン」、「スポーツ走行会」の3つのクラスを設定。フォルクスワーゲン最新モデルのテストドライブやサーキットタクシー、トークショーなどイベントも盛りだくさん。問い合わせ・申込みは、太田哲也スポーツドライビングスクール事務局まで。

http://www.sportsdriving.jp ☎045-948-5540